

第2回日本混合研究法学会年次大会に向けて

第2回日本混合研究法学会年次大会 大会長 尾島 俊之



日本混合研究法学会は昨年発足し、国際混合研究法学会（Mixed Methods International Research Association; MMIRA）のアジア地域会議との共同開催として第1回大会が行われました。これに引き続き、この度、第2回年次大会を開催することとなりました。

現代社会はものごとが複雑化し、次々と新しい課題が発生する中でその対応が求められています。対応のための科学的な知見として、数量的な研究が重視されることが多いですが、想定していなかった項目については無力です。一方で、質的な研究は多様で詳細な情報の収集が可能です。効果の大小を比較して対応の選択をするなどは苦手です。そこで、この両者の方法を統合した混合研究法がとても重要になっています。

混合研究法の考え方そのものは長い歴史を有しますが、MMIRAでさえ2014年に設立大会が開催されたばかりです。したがって、混合研究法の実践の歴史は国際的にみても未だ発展途上にあるといえます。

そこで、日本混合研究法学会の今回の年次大会では、メインテーマを『混

合研究法への誘いー多様性からの創発』とし、昨年に引き続き「誘い」を強調するとともに、新たに「多様性」を副題に加えることによって、さらなる一步を踏み出すきっかけとさせていただきます。学会参加者の中には、混合研究法に長年取り組まれてきたかたもいる一方で、最近、取り組み始めたかたも多いことと思います。また、専門とする学問分野も実に多様です。今回の年次大会によって、さまざまな経験や立場の方々が意見交換し合うことによって、より良い混合研究法を創り、発展させていく場のひとつとなればと考えています。

第2回日本混合研究法学会年次大会概要

第2回日本混合研究法学会年次大会 実行委員長 野崎 真奈美



本会議は、近年世界的に、医療、看護、教育といった実践研究分野において積極的に用いられ始めた研究手法である「混合研究法」に関する学会である、日本混合研究法学会の第2回年次大会である。2015年9月に立命館大学いばらきキャンパスにおいて第1回年次大会を、国際学会である国際混合研究法学会（Mixed Methods International Research Association: MMIRA）の「アジア地域会議」と共同開催しているが、今回は特に国内の研究者に向けて、日本語を主要言語として大会を開催する。

本会議の目的は、まだ十分に活用されていない本研究法について、日本の研究者の間で普及・啓発を行うことである。テーマは『混合研究法への誘いー多様性からの創発』と決定した。混合研究法は主に医学・看護学系研究者の間で広く用いられているが、これらの領域にとどまらず、心理学、教育学、社会学など分野を問わず広く学際的に混合研究法に関心のある参加者を募り、学際的な視点から混合研究法に関する活発な議論を展開する場を提供する予定である。

大会1日目には *Journal of Mixed*

*Methods Research*の現共同編集委員長であるマイク・フェターズ氏（ミシガン大学家庭医療学講座）を招聘し、混合研究法を用いた研究論文の評価方法についてセミナーを開催する予定である。抱井尚子氏（青山学院大学国際政治経済学部）による基調講演、および混合研究法に関する疑問について会場の皆様と共に議論するオープンフォーラムも企画している。

大会2日目は、研究発表とポスターセッション、および斎藤清二氏（立命館大学総合心理学部）による招待講演、最後に3名の日本人研究者によるシンポジウム・パネルディスカッションを行う。

第2回日本混合研究法学会年次大会

日時: 2016年8月27日(土)~28日(日)

場所: 東邦大学看護学部



アクセスマップ http://www.nurs.toho-u.ac.jp/access/access_index.html

JR 京浜東北線大森駅 or 蒲田駅からバス/京浜急行大森町から徒歩

〒143-0015 大田区大森西 4-16-20

* 参加申込はこちら→ <http://www.jsmmr.or.jp>

テーマ: 『混合研究法への誘いー多様性からの創発』

大会長: 尾島 俊之 (浜松医科大学健康社会医学講座)

8月27日(土)

大会プレ企画: 「混合型研究論文査読セミナー」

講師: マイク・D・フェターズ (ミシガン大学家庭医療学講座)

基調講演: 「日本における混合研究法コミュニティの創生と未来」

抱井尚子 (青山学院大学国際政治経済学部)

MMR オープンフォーラム:

マイク・D・フェターズ (ミシガン大学家庭医療学講座)

亀井智子 (聖路加国際大学大学院)

八田太一 (京都大学 iPS 細胞研究所)

抱井尚子 (青山学院大学国際政治経済学部)

8月28日(日)

招待講演: 「EBMとNBMの統合的理解-実践と研究」

(EBM: 根拠に基づく医療、NBM: 物語りと対話に基づく医療)

斎藤清二 (立命館大学総合心理学部)

シンポジウム・パネルディスカッション: 「混合研究法の実践的活用」

操華子 (宮城大学看護学部)

河村洋子 (熊本大学政策創造研究教育センター)

長友隆志 (宮崎県立高鍋高等学校)

大会プレ企画: 事前受付 正会員・学生会員 4,500円 非会員 5,500円 (8月15日振込締切)

セミナー参加費: 当日受付 正会員・学生会員 5,000円 非会員 6,000円

*** 大会プレ企画には人数制限がございますので、あらかじめご了承ください。**

本大会参加費: 事前受付 正会員 5,000 (2,500)円 非会員 7,000 (3,500)円 (8月15日振込締切)

※()は学生会員当日受付 正会員 6,000 (3,000)円 非会員 8,000 (4,000)円

*** 演題募集は締め切りました。**

2016年3月5日～6日ワークショップ 「量的研究と質的研究の研究デザインと質的研究の手法」 開催報告

**ワークショップ： 量的研究と質的研究の
研究デザインと質的研究の手法**

講師： Joel Gittelsohn

ジョンズ・ホプキンス大学

ブルームバーグ公衆衛生大学院教授

場所：東京大学本郷キャンパス



2016年3月5日（土）と6日（日）に、ジョンズ・ホプキンス大学ブルームバーグ公衆衛生大学院教授 Joel Gittelsohn 先生をお招きして「量的研究と質的研究の研究デザインと質的研究の手法」を開催いたしました。キャンセル待ちも出る中、全国から42名の方に参加いただきました。本ワークショップでは3つの目標をもって学びました；1. 質的研究についての基本的な考え方、方法について学ぶ。2. 質的研究法と量的研究法の考え方と方法を組み合わせるための様々な戦略を探索する。3. 公衆衛生（その他参加者の興味のある事象）の視点から混合研究法を考える。

参加者らとディスカッションを交えて理論と実践にむけての包括的な内容となりました。その2日間のもようをご報告します。

1日目

始めはGittelsohn先生のこれまで行った途上国における母子の食環境改善の介入研究の紹介や、現在進行しているアフリカ系アメリカ人の子どもの肥満予防を目的とした政策を含めた広範な領域での食環境の介入研究を例にして質的研究の利用例について詳しくご説明をいただきました。

後半は、In-depth interview, focus groups, direct observationの理論と実践に向けてのそれぞれの調査方法について学びました。洋裁用ボタンを特徴ごとにいくつかの集合体にわけて調査目的に応じて対象者や分析方法を考える参加者どうしのディスカッションが設けられました。Gittelsohn先生への質問や参加者どうしのディスカッションが白熱するまま、懇親会で

参加者と交流を深めました。

2日目

始めは混合研究法についての研究デザインについて、調査の流れや分析方法、論文の書き方や投稿先などをご紹介いただきました。ここでは量的研究と質的研究のそれぞれの特徴を確認し、参加者らが構想する研究内容を具体例として適切な研究デザインについて議論しました。

後半はデータのまとめ方や解析方法について、インタビューの言葉を書き起こしたデータをもとに、質的研究の解析ソフトを使用して解析法をご紹介いただきました。

最後に、混合研究法について全般的な質問や討議が行われ、それらをまとめて終了しました。講義内容はもちろん、参加者の中から質的研究の経験のある方を中心に日本語での講義内容のまとめをしていただいた事も評価をいただきました。

謝辞：このワークショップの開催にあたり、日本混合研究法学会から後援いただきました。また、会場の確保について東京大学大学院健康教育・社会学分野から支援をいただきました。実行委員一同心より御礼申し上げます。

混合研究法ワークショップ実行委員会

山口美輪（医薬基盤・健康・栄養研究所 特別研究員）、桐谷麻美（カロリンスカ研究所 研究員）、横内陳正（東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 大学院生）、杉山雄大（国立国際医療研究センター 上級研究員）

報告者：

山口 美輪
医薬基盤・健康・栄養研究所 特別研究員

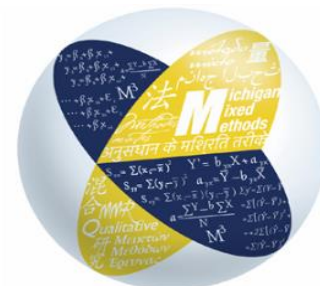
Michigan Mixed Methods spring workshop 2016 ～Mixed Methodsに浸かりきった三日間を振り返って～ 参加報告

**ワークショップ： Michigan Mixed Methods spring
workshop 2016**

講師： ジョン・W・クレスウェル

マイク・D・フェターズ

場所： ミシガン大学



**Michigan Mixed Methods
Research and Scholarship**

2016年3月31日から4月2日にかけてミシガン大学にて開催されたMixed Methods Workshopに参加したので、その様子と雑感を報告したい。

【Workshopの特徴】

今回のWorkshopでは、参加者が各自の研究計画をMixed Methodsとして可視化することができるようになることをゴールとしており、参加者はMixed Methods DiagramとJoint Displayを成果物の一つとして持ち帰るものであった。これを達成するために、事前課題として、Mixed Methodsを可視化する上で鍵となる文献リストが渡され、各自の研究課題、研究目的、Mixed Methods Designを明確化させた研究ドラフトの提出が求められた。Workshopでは、Mixed Methods Researchに合わせた目的の設定からJoint Displayのプロトタイプ作製までの单元ごとに、講義-20分、質疑応答-10分、実習-20分、1対1ディスカッション-10分という流れでプログラムが組まれていた。特に1対1ディスカッションは、参加者どうしが5分の持ち時間で研究（の一部）を説明しフィードバックコメントをするもので、初見のMixed Methods Researchを短時間で共有する訓練として最適であったように思われた（写真1）。また、この3日間には、各研究分野の専門家とのコンサルテーションまで用意されており（写真2）、最終日のポスターセッションでは各自の研究デザインとダイアグラムを発表した（写真3）。（6頁につづく）



写真1：講義の様子

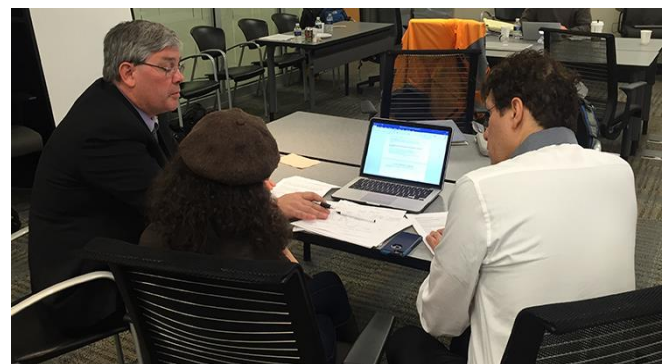


写真2：コンサルテーションの様子

報告者：

八田 太一
京都大学 iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門
日本混合研究法学会 学会誌共同編集委員長

Michigan Mixed Methods spring workshop 2016 ～Mixed Methodsに浸かりきった三日間を振り返って～ 参加報告

(5頁よりつづき) Workshopには約30名が参加、海外からは、日本から3名、南アフリカ、タイ、プエルトリコから其々1名の参加者がいた。著者が話することができた参加者には、家庭医、看護師、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士など健康科学分野の実践家が目立ったが、中には大学図書館の司書もあり、健康科学への実践的な取組みが活発であるミシガン大学で医療を背景に持たない研究者との出会いも新鮮であった(写真3)。特に、日常英会話が苦手な著者にとっては、Mixed Methodsに関わる内容以外には聞き慣れない話が多く、日本では体験出来ないくらいMixed Methodsに浸かりきった3日間であった。

【Workshopをふりかえって思うこと】

Workshopをふりかえって改めて感じる事が出来たことは、Mixed Methods Designと統合integrationの重要性であった。読者の皆さまにも経験があると思うが、統合という概念は分かるようで分かりにくく、量と質を統合のさせ方はMixed Methodsにまつわる質問の中でも最頻出問題であるといえよう。Workshopでは、Mixed Methodsの全体的な話をする場面ではintegrationという言い回しを、デザインや具体例を述べる場面では量と質の関係がより明確な用語(comparingやconnectingなど)を当てていた。統合という概念は包括的な概念であって状況によって細かく使い分けられる、当然といえば当然だが、そのことに気が付くことで、Mixed Methodsの見え方が変わり、デザインの重要性についても理解を深めることが出来るのだ。講師陣にとっては自明だが、Mixed Methods に対する理解を積み上げる際にこのような補助線を引いていく作業が、今後、日本で必要になるかもし

れない。

最後に、著者の参加を快く迎えて下さったFetters先生とCreswell先生をはじめ、海外からの参加手続きにご助力頂きましたMotohara氏とDuby氏、そして、日本から参加されていた先生方と現地でお会いした先生方のおかげで充実した三日間を過ごすことができました。ここに御礼申し申し上げます。



写真3: Workshop最終日の
ポスターセッションの様子



写真4: Workshop参加者と講師陣の
集合写真

報告者:

八田 太一
京都大学 iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門
日本混合研究法学会 学会誌共同編集委員長

米国総合診療医学会2016 (Society of General Internal Medicine) 参加報告

この4月より、米国ハーバード大学Beth Israel Deaconess Medical CenterのDivision of General Medicine and Primary Careにて、プライマリ・ケアの研究や教育について学ぶ機会をいただいています。今回米国滞在中に、5月11-14日にフロリダのハリウッドで開かれた総合診療医学会（Society of General Internal Medicine: SGIM）に参加する機会があったので、混合研究法の状況について報告したいと思います。

学会テーマは、Generalists Engaged in Population Health – Improving Outcomes and Equity through Research, Education and Patient Careです。トピックはaging, health disparities, health policy, healthcare delivery and redesign, medical ethics, professionalism, research methods などと多岐にわたります。健康や疾病、治療や意思決定に関与する社会的要因や医療システムの問題を取り上げている点が、他の臨床医学系の学会と異なり特徴的といえます。

症例報告も含め1000を超える発表があり、多くは量的研究で、高度な統計手法が用いられるものが目立っていました。そのなか、質的（qualitative）という単語がタイトルに入っているのは20題、



混合研究法（mixed methods）とある研究は3題のみでした。また、質的研究に関するワークショップが1つ開催されていました。ちなみに2014年の北米プライマリ・ケア研究学会（North American Primary Care Research Group: NAPCRG）でも、質的とあるのは24題、混合研究法とあるのは7題、ワークショップ1つでした。タイトルにこれらの言葉を含まない演題もあるにせよ、この状況から医学・医療系分野において、混合研究法の使用はまだ黎明期にあることがうかがえます。

数の面からはこのような状況ですが、せっかくなので質的にこれらの演題をみると、SGIMで混合研究法が用いられていた3演題は、「進行がんの治療に対して患者が抱く希望に関する研究」「内科研修医を対象とした（8頁につづく）

報告者:

井上真智子
ハーバード大学
日本混合研究法学会理事

米国総合診療医学会2016 (Society of General Internal Medicine) 参加報告

(7頁よりつづき) ウィメンズヘルス研修カリキュラムの構築」「糖尿病予備軍の労働者における糖尿病発症予防のための初期介入」でした。ちなみにNAPCRGでは「ヘルスコーチに関する医師の経験」

「軽症認知症患者とその家族のニーズに対してケースマネジメントはどう対応できているか」「患者教育資料の情報評価法に関する内容的妥当性の検証」などがありました。患者、医療者の思いや体験、医療提供体制、教育カリキュラム、教育ツールの評価などで混合研究法が用いられていることがわかります。いずれも複雑系から成る現代の医療において混合研究法が有用であることを示唆するものであると感じました。

医学・医療系においては、これまで数理統計に依拠する論理展開が重要視されてきており、若手医師にとって基礎的な統計手法やその考え方を身につけるだけでもかなりのトレーニングを要します。今後、質的研究のパラダイムへの理解・関心が浸透し、さらに量と質の統合へ、と混合研究法が活発に用いられるようになるにはまだもう少し時間がかかりそう

だと感じました。背景には、医学・医療系で質的研究・混合研究法を教えられる研究者が少なく、医師たちが受ける研究

トレーニングの大半が量的研究に大きく偏っている、ということもあると考えられます。今後、プライマリ・ケア領域の若手研究者を育成するにあたって、少なくとも量的、質的、そして混合研究法の基本に触れることのできる体制を整えることが必要であると認識するきっかけとなった体験でした。



学会会場付近の風景

報告者:

井上真智子
ハーバード大学
日本混合研究法学会理事

言語教育と混合研究法の融合と広がる可能性 ～第1回日本混合研究法学会に参加して～

2013年4月に博士後期課程に入学した私は、入学直後から混合研究法に関することを少しずつ耳にする機会がありました。しかし当初は質的調査で博士論文の研究を実施する予定であったため、混合研究法に関心はありませんでした。

指導教授や副査の先生より指導を受けるうちに、指導する日本人大学生が尋ねる英語の質問、また学生が質問行動時に感じるフェイス（面子）、という英語指導と英語学習者の心理に焦点を当てる研究課題に決まりました。その研究では質的調査に量的調査を加えることで、幅が広がると提案されたものの、指導教授の方針で今回の研究は量的データと質的データのトライアンギュレーションを行うことになりました。それでも混合研究法が言語教育の分野でどのような可能性を持つのかを学ぶために、2015年9月に開催されました日本混合研究法学会の第1回年次大会に参加しました。

初心者対象のワークショップ「混合研究法入門」（ジョンソン先生とフェッターズ先生が担当）では、まず収集する量的データと質的データを特定しました。私の研究では、対象者である大学生がタスクで尋ねる英語6種類の質問内容が質的データ、6種類の質問の頻度が量的データ、そして参加者全員への面接調査の内容が質的データになることを確認しました。また3種類の基本型デザインのうち、量的データと質的データが独立して収集される順次的デザインの研究に当たることも理解しました。し

かしワークショップが終わっても、まだ解決できていない疑問があることに気づきました。

1. 結果の執筆方法

結果は、量的及び質的データをまとめるべきなのか、それともそれぞれを別々に書くべきなのか。

2. 言語教育系論文の採択率

言語教育研究の日本人研究者から「言語教育系のジャーナルでは、混合研究法に対する理解が少ない」という話を聞き、採択率が低いことを示唆されました。

前者は私が論文を執筆し、査読をしていただくことで解決するでしょう。後者は定かではありませんが、採択率が高くなる混合研究法のジャーナルに投稿するか、それとも採択率が低くても、専門のジャーナルに投稿するか、決め難いことです。理想的ではありますが、採択のハードルにこそ、言語教育と混合研究法の融合の可能性が秘められていると考えます。

現在は、博士論文の草稿を執筆中であるため、混合研究法を用いた研究はまだ始まっていません。次は、現在の研究課題を混合研究法で実施することで、さらに研究の幅を広げていくことを目指しております。

報告者：

武田礼子
国際基督教大学大学院
アーツ・サイエンス研究科
言語教育(英語)専攻博士課程

論文紹介

Exploratory analysis of textual data from the Mother and Child Handbook using the text-mining method: Relationships with maternal traits and post-partum depression (英語)

The Journal of Obstetrics and Gynecology Research (2016)

著者

Yoshio Matsuda, et al.

国際医療福祉大学病院産婦人科周産期センターの松田義雄教授が産婦人科の国際誌に発表した混合研究方法による論文です。母子健康手帳に記載された妊婦自身の記録としての自分自身の体調や気持ちを書き留めた文章をテキストマイニング法で分析することによって、産後うつリスクが高い妊婦を拾い出すことができるかを検討することを目的としました。同病院で診療を受けている正常妊婦58人について、自由記載の記録を、テキスト型データ解析ソフトウェア WordMiner（日本電子計算株式会社製）を用いて文節や単語に分解して分析を行いました。妊娠中の不安は、妊娠20週前後の時点で、STAI（状態・特性不安検査）を行いました。また、産後うつのリスクについては、出産後1か月の時点でEPDS（エジンバラ産後うつ質問票）を用いて調査を行いました。不安（特性不

安）の高い群と低い群、産後のうつ得点の高い群と低い群で、各言葉の出現頻度を比較しました。その結果、不安が高い群で有意によく用いられていた言葉は、「仕事」、「出産」、「つらい」、「夜」、「退院」、「出血」、「準備」であり、逆に不安が低い群で有意によく用いられていた言葉は、「活発」、「健診」、「超音波検査」、「最近」、「医者」、「家族」、「妊婦」、「大丈夫」でした。産後のうつ得点が高い群でよく用いられていた言葉は「胎動」、「つわり」、「食欲」、「心配」であり、うつ得点が高い群でよく用いられていた言葉は「赤ちゃん」、「安心」でした。母親が記載した文章をこのように分析することは、不安妊婦と産後うつのリスクを発見する上で有用であると考えられました。

文責:

尾島俊之
浜松医科大学健康社会医学講座
日本混合研究法学会副理事長

書籍紹介

成田慶一 著

『自己愛のトランスレーショナル・リサーチ 理論研究・混合研究法・臨床実践研究による 包括的検討』 創元社(2016年3月出版)

新刊



本書は、自分を価値ある存在だと思えることを意味する「自己愛」とその偏りを意味する「ナルシシズム」について、臨床心理学の観点から論じたものである。

章立ては以下の通りとなっている。

第Ⅰ章 自己愛・ナルシシズムに関する研究レビュー——文献研究

第Ⅱ章「建設的な自己愛・不適応的な自己愛」再考——実証的研究

第Ⅲ章 医師患者関係に持ち込まれる自己愛の問題——がん医療におけるインフォームド・コンセント観察研究より

第Ⅳ章 自己愛に関する累積的事例研究——臨床実践的研究

第Ⅴ章 総合考察

本書の第Ⅱ章から第Ⅳ章は方法論的構造によって組み立てられている。この構造は

本書を自己愛／ナルシシズムに関する包括的な研究とするために必要なものであった。というのも、多くの実証的研究と臨床的研究との間には、共通言語としての操作的定義がなされた用語はあるものの、容易には埋められない本質的な乖離があると筆者には長年感じられてきたからである。

この構造における重要なポイントは第Ⅲ章の観察研究である。この観察研究デザイン自体が、量的アプローチと質的アプローチを収斂させた混合研究法という性質をもっており、なおかつ本書全体においては第Ⅱ章と第Ⅳ章を橋渡す研究として機能しているという構造になっている。そのような構造で、「静的」な自己愛／ナルシシズムと「動的」な自己愛／ナルシシズムを論じることで初めて、質問紙によって量的に変換されたデータと、対話場面における実態としての行動や力動との関連を検討することが可能になり、また臨床事例についての考察の視座を共有可能性のあるものとして提示することができたと思われる。「実証的」研究によって算出される「仮想空間（cyberspace）における最適解」は、「臨床的」な現場である体験世界（real world）に持ち込まれてこそ活かされるものであろう。極めて多様な現象を取り扱う心理学の実践的研究であればこそ、このような研究デザインや方法論が今後さらに洗練され、基礎的研究と臨床的研究が有機的に結びついていくことを期待したい。

202頁 4,320円

文責:

成田慶一

京都大学医学部附属病院 臨床研究総合センター
日本混合研究法学会 学会誌共同編集委員長

第2回国際混合研究法 学会(MMIRA)

【日程】：2016年8月3-5日

【場所】：英国・ダーラム大学

【大会テーマ】：Moving Beyond the
Linear Model: The Role of Mixed Methods
Research in an Age of Complexity

(線形モデルを超えて：複雑性の時代
における混合研究法の役割)

詳細は下記を参照ください。

*** 演題募集は終了しています。**

[https://www.dur.ac.uk/sass/events/
events/mmira2016/](https://www.dur.ac.uk/sass/events/events/mmira2016/)

編集後記

本号にご執筆いただいたすべての先生
方にお礼申し上げます。

第3号は6ヵ月後に発行予定です。掲載
ご希望の記事がございましたら、事務局
メールアドレスまでお送り頂けますよう
お願い申し上げます。記事は随時受け付
けております。

それでは8月に東京の東邦大学看護学部
で開催されます第2回年次大会にて皆さま
とお会いできますことを心待ちにしてお
ります。

事務局Email: jsmmr.adm@gmail.com

ニュースレター編集委員長：田島千裕

事務局からのお知らせ

【会費】

会計年度は4月～翌年3月です。郵送
にて会費請求書が届き次第、お早め
にお振込みをお願い致します。

【会員情報】

会員の基本情報（住所、勤務先な
ど）が変更となった場合は、メール
にて事務局まで届け出てください。

【メーリングリスト】

会員向けメーリングリストで案内を
希望されるイベント（ワークショップ
や研究会など）がございましたら
事務局までご連絡ください。

事務局

Email: jsmmr.adm@gmail.com

日本混合研究法学会 ニュースレター第2号

【発行日】2016年6月30日

【発行者】日本混合研究法学会

【理事長】抱井尚子・青山学院大学

【副理事長】尾島俊之・浜松医科大学

【理事】

福田美和子・東邦大学

八田太一・京都大学

稲葉光行・立命館大学

井上真智子・ハーバード大学

亀井智子・聖路加国際大学

成田慶一・京都大学

野崎真奈美・東邦大学

田島千裕・恵泉女学園大学

【事務局】

福田美和子・東邦大学